HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	マーケティングから「マーケティング学」へ，そして「商学」へ（その３） ― 日本人の貨幣に対する対応の歴史的考察 ―
著者	黒田，重雄；Kuroda，Shigeo
引用	北海学園大学経営論集，23(2)：35-54
発行日	2025-09-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《研究ノート》

マーケティングから「マーケティング学」へ，そして「商学」へ（その３）

── 日本人の貨幣に対する対応の歴史的考察 ──

黒　田　重　雄

はじめに

本連稿は，商学という学問が生まれる素地を求めて書いている。そのきっかけは，筆者が現行マーケティングを学問にしてみたいとの思いで研究していく過程で，「商学」という学問がクローズアップしてきたこともある[1]。

巷では，「商学」は，古臭い，という声が大きい。商学は，「マーケティング」に取って代わられたという説も出ている。しかし，筆者の研究過程で，商学は，古くて新しい重要な学問ではないかという考えが沸々と湧いてきている。

その商学がどのような学問であるのか，という点をもう少し明らかにしてみたいとの思いで，この連稿を書いている。

これまでの二つの研究ノートでは，

（その１）マーケティングを学問に高めようとすると，商学という学問に行き着くのではないかという考えが何故出てくるのかについて述べた。その際，歴史的な考察が欠かせないことも強調している。

（その２）歴史的考察を進めると，商学という学問の研究には，日本の中世期まで遡る必要があることが分かってきた。そしてこの武士を中心とする混乱の時代にすべての人びとがどういう生き方をしていたのか，そのことを明らかにするべく職業の在り方とその多様性について考察した。

そして，今回（その３）は，中世期における日本人が貨幣（鋳造貨幣）というものに対してどのような意識をもって対応し，日常生活をしていたのかについて考える。

１．お金と日本社会

現在，日本社会では，「お金」が大きな問題となっている。政治の世界では，政治家同士のお金の授受が問題となっているし，巷では，高齢者からあの手この手で「お金」を引き出させる詐欺事件が一向に収まる気配がない。

日本人は，「お金」に執着する国民なのであろうか。もしそうだとするとそれはいつごろから興ったことなのかを考えてみる。

作家で独自の歴史観を持つという司馬遼太郎は，「われわれは，室町の子である」とか「室町からゼニの時代が始まった」と述べている[2]。

なぜ，そういう感想を持ったのか。室町時代は，鋳造貨幣のない社会だったはずである。

にもかかわらず，評論家の山本七平（1993）は，「日本人は，基本的に，銭を好む体質を持っていたのではないか」と書いている[3]。

和銅元年（708 年）日本ははじめて貨幣を鋳造した。これが和同開珎であることは教科書に載っている。以後十二種類の皇朝銭が鋳造され，韓国ではややおくれて高麗の成宗十

五年（996 年）に鉄銭が，粛宗七年（1102 年）に銅銭が鋳造されている。そして日本の場合も，和銅元年から約 250 年間，政府がいかに努力しても貨幣は定着せず，永延元年（987 年）一条天皇が銭貨の通用の促進を命じながら，一面ではその通用を限定し，仏事にだけ全面的に使ってよいとしたときに，長い貨幣定着の努力は失敗に終わった。そして准米・准布・准帛（ばく）とよばれる生産物が納税および交換手段に用いられた。これらは一種の物品貨幣と見てよいであろう。

……

永享元年（1429 年）韓国の使節として来日した朴瑞生を驚かしたことは，金（かね）さえあれば，何も持たずに旅行ができることであった。さらにその前，応永二十七年（1420 年）に来日した宋琦璟は，日本の二毛作・三毛作に驚くとともに，乞食が米でなく銭を欲しがるのに驚いている。確かにこれでは乞食でなく乞銭である。1420 年から 29 年とは足利義持から義量の時代，日本の貨幣経済はその時代にすでに，乞食にまで浸透していた。また金さえ持てば自由に旅行ができるということは，金を払えば泊まれる宿屋と，金を払えば乗せてくれるタクシーのような馬，金を払えば渡れる橋や渡し舟，有料道路ならぬ有料橋もあったということである。

なぜ，この時代に人々はお金（ゼニ，銭）を欲したのか。当時は，鋳造銭はなかったが，中国の宋銭や明銭が大量に流入されていたし，また，ビタ銭など悪銭も蔓延（はびこ）っていたという。

また，中世期の「銭」に対する日本人の感情をあらわすものは（具体的に，室町期の経営的・マーケティング的センスをイメージさせる），日本の中世史家の太田由紀夫（2021）の論考である[4]。

中国製生糸は 15 世紀中葉の段階で日本において高い需要をすでにもっていた。永享四年度（1432）と宝徳度（1451-54）の遣明船（けんみんせん）で中国に渡航した貿易商・楠葉西忍（くすばさいにん）の談話には，

（明の）都北京において銭一貫と交換して得た銀一両を，南京で売れば銭二貫となり，寧波（「明州」）では三貫になる。この銭三貫で生糸を買って日本で売れば儲けになる。

〈『大乗院寺社雑事記』永正二年（1505）五月四日条〉

とあり，遣明船貿易の際，大量の生糸が盛んに買われて日本へ持ち帰られた。その理由は「唐船の理（＝利）は生糸に過ぐべからず」といわれるように，遣明船が将来した唐物のなかで，生糸がもっとも儲けの大きな商品だったからである（約 5 ～10 倍の純利益）。さきの引用史料が述べるとおり，日本船の入港地である寧波（にんぽー）は，日本にとって生糸をはじめとする唐物の重要な入手地であり，列島での唐物の消費拡大にも一役買っていた。

これは，15 世紀あたりの話であるが，日本中世史専攻の桜井英治（2009）は，この室町時代における人々の金銭感覚について書いている[5]。

すなわち，このこの頃は重商主義の時代であったが，日本人の金銭感覚は，とくに鋳造銭についてはどうだったのかというと，「外国銭」を用いることに抵抗はなかったとしている。

この点，先述した山本七平（1993）によると，この外国銭を用いることにいたった理由は，平安時代の「平清盛」による貿易に対する貨幣使用の考え方にまで遡ると書いている[6]。

かつて世界三銅産国の一つといわれた日本も，その鉱石は殆どすべて硫黄と結合した硫化銅であり，これの精錬技術が当時はまだ開発されていなかったからである。こういう状

態だとお役人はあらゆる「できない条件」を並べたてて不思議ではない。もしこの状態がそのまま継続したら，日本の経済はそのまま停滞したかも知れぬ。

そのとき，「中国から貨幣から輸入して流通させればよい」というまことに独創的な発想をした人間がいた。それが平清盛である。長寛二年（1164 年），彼は周囲の猛反対を押し切って宋銭の輸入を断行した。日本はちょうど貨幣経済に移りうる段階に来ていたのでこれが爆発的に流通する。するとそれによって経済は発展し，さらに多くの貨幣が必要となる，という循環を繰り返し，それがその時から約 250 年後に日本を訪れた韓国人使節を驚かしたわけだが，その端緒をつくったのが清盛であった。「武士とは何か」はさまざまな定義ができるが，「土地の所有権を主張し，貨幣を定着させたもの」ともいえるであろう。

これを「渡来銭」といい，寛永十四年（1637 年）まで，約 470 年間，日本で流通していたのは宋銭や明銭である。

ただし，中世史家の中島圭一（2022）によると，平家（清盛）説は資料的な裏付けに乏しい，と述べている点に注意する必要がある[7]。

つまり，中世史家の桜井英治（2019）によると，「日本人は，そもそも銭を好む体質を持っていたのであり，贈り物にも，現在の西欧には見られない「お金」を送ったり，貰ったりしている」と書いている[8]。

２．室町時代はどういう時代であったのか

承久の乱や応仁の乱という大乱を経た，中世期の人びとの精神状態を考えて見る。

日本中世史家の三枝暁子によると，あいかわらず戦争状態が続いていたという[9]。

この状態で，人びとは生きていかねばならないが，どうしたのか。

これまでも「日本人とは何か」について色々言われてきた[10]。

また，たとえば，数学者の岡 潔は，「数学には情緒がなければならないが，日本人には情緒がある」としているし[11]。また，評論家の小林秀雄は，「もののあわれ」を知っている人々であるという[12]。

経済学者の寺西重郎は，「日本の経済システムの根柢には鎌倉新仏教がある」と述べている[13]。

確かに，鎌倉時代に生まれたという禅宗，たとえば，空海の密教，道元の曹洞宗や栄西の臨済宗が大きな役割を果たしたと思われる。「今を如何に生きるか」である。

ゴーギャンの「人はどこから来て，どこへ行くのか」の絵にある「人の一生を考える」のは，形而上学の問題だが，今生きていくためには何をしなければならないのか，の形而下の問題が重要となる。

とにかく，来世が幸せであるように祈るか，ではなく，この現生に何をして幸せに生きていくか，であった。つまり，これから自分と家族が生活していくためには今どうすればよいか，であっただろう。

当時の社会は，重商主義の時代であったと網野善彦（2008）は言う[14]。重商主義というのは，政治学者の川出良枝によれば，競争に規制にない社会のことである[15]。一方，日本の中世史家の清水克行は，ワンダーランドの時代であったともいう[16]。

そこで生きていくためには，何でもやる覚悟であった。とにかく生活に必要な物を獲得するために「銭」を求めたはずである。鋳造銭でなくても，外国銭だろうと悪銭・ビタ銭だろうととにかく銭であった。

ところで，銭をはじめとする交換物が自由に移動するには，どういう社会でなければならないのか。それは，まず第一に資本主義社会である。

3．経済学者の岩井克人による資本主義社会の定義

経済学者の岩井克人は，新著を出している[17]。この中で岩井は，「資本主義」の定義をしているが，基本的には，岩井の前著『資本主義から市民主義へ』の内容に即している[18]。

そこでは，資本主義を「商人資本主義」と言い換える。この原理は，「差異性」に基づいており，それによって利潤を生み出すことである，という。

> **産業資本主義のイデオロギーとしての社会主義**
>
> かつては，工場で働く男性労働者は職工とよばれ，他人の家庭のなかで働く女性労働者は女中とよばれていました。それは明らかに農村の過剰労働力のはけ口だった。だが，60 年代の後半に入ってからは，農村の過剰人口が枯渇してしまった。もう安い賃金で労働者を働かせることはできなくなった。職工という言葉も女中という言葉も，使用禁止語になってしまいました。そうすると，機械設備をもっているだけでは，労働者を大量に雇おうとすると高い賃金を払わなければならないので，もはや利潤をえることはできなくなった。そこで資本主義的企業は何を考えたか。
>
> 差異性によって利潤を生み出すという商人資本主義の原理を，意図的に使うようになったわけです。もちろん，商人資本主義（岩井は，商人が活発に動き出した時代の状況をこのように表現している）の段階でも，商人自身はその原理を意識していたわけです。たとえば大航海時代における遠隔地商人は，インドでコショウを安く買い，ヨーロッパでそれを高く売っていたわけですから，二つの土地のあいだの価格の差異性を利潤に転化するという原理を意識的に使っていたはずです。

日本の中世期における他国との貿易においても，先に見た「差異性」に関する日本の中世史家の大田由紀夫の論考である[19]。

岩井の『ヴェニスの商人の資本論』では，「利子とか利ザヤ」の発生が資本主義の萌芽とみている[20]。

> つまり，「分配に関する意思決定のあり方」については定義の中には入ってこないと考えている（暗黙には，入っていると考えても不都合は生じないと思うが）。したがって，小生は，「利子」概念だけからいえば，日本にはかなり古くからあったと考えているということなのである。

ビジネス思考の取り入れにおいて中東やアジア諸国に比して早さに勝っていた理由について，流通論研究者の林 周二（1999）が書いている[21]。

> まず全体を大観しておく。76 ページの時代比較表から判るように，日本は歴史の夜明けは最も遅れたが，それからあとの歴史時間の進行は驚くべく速かで，西アジアや中国を追い越し，西欧に次いでトいち早く近代化を遂げた。古代期が長くて未開が続いたのは，日本の地理的位置から容易に肯けるが，欧亜大陸との交流ができてからあとの追跡の速かったことは一体何で説明できるのであろうか。商人史の視点からそのことを考えて行こう。
>
> “日韓中の 3 国は，東南アジアのシンガポール辺りを含め儒教文化圏を形成し，地球上，欧州に次いで経済的離陸をするであろう”とは，一部の内外経済学者の問で指摘されたことであるが，その根拠は，儒教の教義が勤勉や倹約の徳を強く支持し，そのことが儒教圏社会を産業化へ導き易くするエートス的要因をなしているから，というのであった。
>
> 著者の考え方は上述の通説とはやや異る。たしかに漢・韓両民族は古来，儒教文化に深

くどっぷり漬っていたが，日本人は（史実を顧れば判るが）民族的にそれほど儒教漬け一辺倒ではなかった。大隈重信（1838-1922）は，日本人の伝統的思考は，諸氏百家でいうなら儒家ではなく法家のそれだと言い切っているが，これは卓見である。島国の日本人はそれぞれの時代ごと海外からさまざまな宗教や思想を輸入した。古くは仏教や儒教，さらに近代にはキリスト教やマルクス主義，さらにドイツ哲学や米国流のプラグマティズムなどの外来思想にも広く好奇心を示し，それらを皆少しずつ貪るように受容したが，そのどれか１つだけに深く染ることは決してなくむしろそれらを片っ端から巧妙に* 儒教文化圏論を最も体系的に論じたものに次の文献がある。金日坤（1984）『儒教文化圏の秩序と経済』名古屋大学出版会。この書物の第５，６章には，韓国李朝時代の商工業についての解説がある[22]。

以上の記述は，黒田重雄（2024）の「研究ノート」に寄っている[23]。また，ここに出てくる金日坤（きむいるごん）教授の書については，かつて日本人が，「エコノミック・アニマル」と呼ばれたことと関連する形で，山本七平の『日本人とは何か。（上）』にも引用されている[24]。

４．室町人の精神

中世期を研究する歴史学者の方からは，室町時代のビジネスが浮き彫りにされている。たとえば，日本の中世史を研究する桜井英治（2009）は，『室町人の精神』をあらわし，人々は混沌と酔狂に時代の転換点を生きる崩れゆく秩序，中世の黄昏」（帯）と書いている[25]。

また，同じ中世史専攻の清水克行（2021）は，「現代のカオス，克服のヒントは中世に」と述べている[26]。

そして，清水は，「中世人の精神構造は世界の辺境地域の人々と同じ」と結論づけている。この中世史家の「アナーキーな社会」のことを，経営や商学という分野においては，「重商主義の時代」と呼ぶことが可能であるとしている。

中世日本史家の網野善彦（2008）が「室町時代は，重商主義の社会であった」と述べているのがそれである[27]。

日本のマーケティングを研究する者にとって，この中世日本史家の網野善彦の書いた，『日本の歴史をよみなおす（全）』（2008）は，きわめて示唆に富むものである。

網野が「日本の社会は，少なくとも江戸時代までは農業社会だったとの意識は，非常に広く日本人の中にゆきわたっています」と言うように筆者もそう感じていた。しかし，網野は，これは基本的に，百姓＝農民と考えたところの間違いであるとする。

もともと日本の社会においては海民（や山民も）の存在を重視してきた網野であるが，この本の中で，「経済社会の潮流」として「重商主義」の社会を想定し，その中で活動する「商人の存在」を重視している。

一方，三枝暁子（2022）は，著書『日本中世の民衆世界―西京神人の千年―』の中で，アナーキーな世界の解釈の一端を示している[28]。

すなわち，三枝は，中世は武士の活躍した時代であったが，「僧侶や神職者，商工業者・農民・被差別民のいずれもが紛争解決の手段として武力を行使した。そしてその前提には，朝廷と幕府の併存という国家権力の分裂性・多元性，それゆえの社会集団の自律性という，中世固有の社会構造があった。すなわち中世とは，寺社に所属する人々から都市・村落に生きる民衆に至るまでの，自律的であると同時に暴力を内包させたさまざまな集団を，より強大な暴力・軍事力をもった幕府が支配・統合しようとした時代であった」としている。

5．室町幕府は企業組織であった

経営学者の伊丹敬之（2023）は，自著『経営学とは何か』で，「経営すること」の定義を書いている[29]。

> 「経営すること」とは，組織で働く人々の行動を導き，彼らの行動が生産的でありかつ成果が上がるようなものにすること

とある。つまり，「経営学」は，出来上がった組織の「管理運営（management）」を問題としている。

一方，「商学」では，まずは，人はどういう仕事をするか（starting-up），どういう組織を作るか，なのである。経営学の先の問題を扱うのである。そして，「マーケティング」は，商学の範疇で「具体的な仕事探し」を取り扱う戦略論としての位置づけである。

先述したが，作家の司馬遼太郎（2014）は，「われわれは，室町の子である」と「要するに，日本史は室町時代から，ゼニの世がはじまった」と述べたことに注目する[30]。

また，作家の五木寛之（2020）に，応仁の乱前後の状況を記述した書き物がある[31]。

> もし親鸞が生きていたとしたら
>
> 現実の世界に目を移せば，政治も経済も大混乱の極みにあります。さらには全世界で内戦がくり返され，土一揆と同じように経済格差を元凶とする宗教紛争，民族紛争の火種はなおも煙りつづけている。それにもまして〈心の内戦〉はますます激化しようとしている。
>
> 平和だなとはとうていいえない。目には見えないものの，世紀末のいまはまさに蓮如が立ちあがった時代，応仁の乱の前夜と同じ状況ではないでしょうか。
>
> くしくも 98 年は蓮如の五百回忌にあたります。それもきっかけのひとつとなって，このところ蓮如がさまざまなかたちで語られるようになりました。同時に，そこでは批判的な意見も出てきています。それはたいへんいいことだと私は思うのです。
>
> 偉大な人物に大きなアキレス腱があるとすれば，それは神棚に祀られてしまうということです。百人いれば百人ともが完全無欠な人格であるかのように古人を見上げることはよくないことです。
>
> 翼賛選挙という言葉がありますが，翼賛信仰もまたむなしい。その点，あちこちで毀誉褒貶が賑やかになってきた蓮如は，いまきっと喜んでいるだろうと思います。宗門外ではこれまではほとんど悪口しか言われなかった蓮如ですから。
>
> ところで，現代において親鸞や蓮如を考えるとは，いったいなにをどう考えることなのか。親鸞や蓮如がどういう存在であったかという歴史の検証・考証は学者や研究者の仕事でしょう。
>
> 作家として私が考えるのは，今の時代にもし親鸞や蓮如が生きていたならば，これらの事件に対してなにを言っただろうか，またなにをしただろうか，ということです。

組織で働く人々の行動を導き，彼らの行動が生産的でありかつ成果が上がるようなものにすること。と言うより，何をしてどう生きていくか，の方が問題だったのではないか。

6．室町幕府の財源はどこから得られたのか

前述されたように，日本のマーケティングを研究する者にとって，中世日本史家の網野善彦の書いた，『日本の歴史をよみなおす（全）』（2008）は，きわめて示唆に富むものである[32]。

重商主義の潮流

もうひとつ考えておきたいことは，前章でもふれましたが，13 世紀後半ごろから，土地にたいする租税だけでなく，商工業者にたいする課税を，支配者も意識的にやりはじめています。とくに後醍醐天皇は，商工業者に全面的に依存した王権を構築しようとしたと思います。たとえば酒屋に税金を賦課したり，土倉に徴収した税金を任せてその運用をやらせたりしていますし，関所の廃立の権限を掌握して，関所料―交通税・入港税を徴収する権限を掌握しており，またそれぞれの領主の所得の価値を銭で表示し，その貫高にたいして 20 分の 1 の税金を賦課しています。

室町幕府も同じように 50 分の 1 税を賦課し，酒屋・土倉役を徴収するなど，その先例にならった税金の取り方をしています。このように，商人・金融業者に依存し，商工業・金融業にたいして積極的に課税しようとする方向は，鎌倉時代後半の得宗専制期からはじまり，後醍醐天皇の建武新政を経て，室町幕府でほぼ制度として安定しますが，これは「重商主義」的政治，商業に重点を置いて支配を維持する動きということができます。

おもしろいことは，そういう政権，王権が，専制的といわれるような支配におのずとなっている点です。たとえば鎌倉幕府の場合，評定衆という有力御家人の合議体があって，この合議体の討議・決定によって政治を動かしていくやり方が執権政治の原則だったのです。ところが北条氏はそれを骨抜きにし，評定をほとんど無視して，自分たちの自由になる側近たちによる「寄合」に依拠して政治をしており，得宗専制といわれる専制政治を行っています。

後醍醐も同様で，古代以来，一貫して続いてきた有力貴族の合議体，太政官の公卿会議を破壊して，自分の意志どおりに動かせるような貴族・官人を官職に任命し，これを駆使して自らの専制的な意志を貫こうとしています。さらに室町幕府の将軍たちの中で，足利義満，義教は，有力守護の重臣合議を無視して自分の意志をとおそうとする将軍専制を貫きます。そしてこのような政権はみな，商工業，流通，外国貿易に依存した王権なのです。これは決して偶然ではないと思います。

少し話を広げると，16，7 世紀から 19 世紀前半ごろまでのヨーロッパのいわゆる絶対主義王権は，やはり封建領主の合議体を無視して，商工業に依存しながら王権が専制的な支配を行っています。

（**筆者注**：網野は，16，7 世紀から 19 世紀前半ごろまでのヨーロッパのいわゆる絶対主義王権と同様に，室町の将軍専制は絶対王政であったということ，このような政権はみな，商工業，流通，外国貿易に依存した王権であったということを言いたかったと考えている）

網野が「日本の社会は，少なくとも江戸時代までは農業社会だったとの意識は，非常に広く日本人の中にゆきわたっています」と言うように筆者もそう感じていた。

しかし，網野は，これは基本的に，百姓＝農民と考えたところの間違いであるとする。

もともと日本の社会においては海民（や山民も）の存在を重視してきた網野であるが，この本の中で，「経済社会の潮流」として「重商主義」の社会を想定し，商人の存在を重視している。

ここで，重商主義（マーカンティリズム：mercantilisme）とは，一般に貿易などを通じて貴金属や貨幣を蓄積することにより，国富を増すことを目指す経済思想や経済政策の総称とされている。

この「重商主義」ということについては，前出の政治学者の川出良枝（1996）が，フランスの啓蒙思想家モンテスキュー（Montesquieu, Charles-Louis de）の著書『法と精神』を解釈する中で，解説している[33][34]。

すなわち，フランスの啓蒙思想家モンテス

キュー（Montesquieu, Charles-Louis de）が著書『法と精神』の中で，商業（商人）に対する評価と期待を行っている。すなわち，彼は，商業に従事する人間を非道徳的な存在とは見ておらず，「商業の精神は，人間にある種の厳密な正義感を生み出す」と考えており，その結果，「商業国家」イングランドの繁栄に高い評価を下している，という。

川出は，次のように述べている。

> （pp.249-251）
> 「重商主義」（Mercantilisme）という概念のレリバンシーには周知のように戦後疑問が呈されてきた。……。批判的な論者の主張するように，たしかにそれは主義（isme）と名付けられるほど首尾一貫した理論体系ではなく，多分に状況に規定された個々の政策の集まりにすぎなかった。
> しかし，そこにある一定の傾向 ── 貿易バランスにおける黒字の追求，マニュファクチュアの保護・育成，特権貿易会社の創設，植民地の建設，海軍増強 ── を見出すことは可能であり，その意味での重商主義を議論することには意味がある。

（筆者注：ここで川出は，“commerce”を「商業」と訳しているが，当時のその言葉には，「農業以外の職業のすべて」の意が込められていたことを銘記すべきである）アダム・スミスが“レッセーフェール”，つまり「自由放任主義」をとなえたとされるのは，この重商主義政策を批判したものとなっている[35]（J.バカンは，「スミスは“レッセーフェール”の言葉は，一度も使っていない」という[36]）。

ところで，なぜ，この室町期が重商主義の時代といわれるのかを考えてみる。いくつか理由が考えられる。

まず，足利政権は，財源が弱く，貿易（「公貿易」）にそれを求めていた。日本の中世史専攻の桜井英治（2015）は，「室町幕府は独自の官庫をもたず」であったという[37]。

> 室町幕府は独自の官庫をもたず，財産の保管から出納業務にいたるまでのすべてを民間の土倉に委ねていたことが知られている。このような土倉を公方御倉というが，これには主に京都在住の山徒の土倉が任じられた。したがって，見賢（僧侶）のような存在を公方御倉そのものとみなすわけにはいかないが，狭義の公方御倉の外延には幕府から同様の機能を期待された金融業者が何人かおり，それがたとえば南都においては見賢であり，北嶺においては光聚院猷秀（僧侶）であったと考える余地はあろう。彼らに預けられた公金の性格については，寺社に寄進される予定の造営料等が当座に預け置かれていたものとも考えられるし，あるいは当初から利殖を目的として彼ら金融業者に運用を任せていたとも考えられるが，現存資料からだけでは何とも判断しかねるというのが正直なところだ。

「室町幕府は独自の官庫をもたず」だった結果，足利政権は，財源が弱く，貿易（「公貿易」）にそれを求めていた。そしてこの貿易には，次の三つの形態があった。

（1）進貢貿易

遣明船は朝貢船である。日本国王（足利将軍）の進貢物を，明の皇帝に捧げる，のが建て前である。使節もまた，自進物として，皇帝に貢物を献じた。これらの進貢に対しては，巨額の頒賜（回賜）があった。そのため，一種の割の良い貿易と考えられた。

日本からの進貢物（馬・太刀・硫黄・瑪瑙・金屏風・扇・鎗）
中国からの回賜（白金・絹織物・銅銭）

（2）公貿易

遣明船の「附塔物」について，「明の政府」

との間で取引される貿易。「附塔物」は北京に送られるのが建て前で，北京で価格が決められて取引された。

日本から（蘇木・銅・硫黄・刀剣類など）

中国から（銅銭・絹・布など）

（３）私貿易

取引の場所が三ヶ所あった。

１，寧波における「牙行」との取引。

２，北京における会同館市易。

３，北京から寧波への帰路の沿道で行われる貿易。

＊＊「牙行」とは，明の政府から官許を得た特権商人。

遣明船の貨物の受託販売，遣明船が日本に持ち帰る貨物の受託購入などにあたった。

私貿易によって日本にもたらされた貨物

（生糸・絹織物をはじめ糸綿・布・薬材・砂糖・陶磁器・書籍・書画・紅線および各種の銅器・漆器等の調度品）

（参：田中健夫『対外関係と文化交流』思文閣史学叢書。昭和 57 年。P101）

（注：抽分銭（ちゅうぶんせん）とは，室町時代の輸入税。日明貿易の際使用された。）

足利政権は，なぜ財源が弱かったのか

足利政権の財源の弱さは，鎌倉時代の封建制を引きずっていたことによる。つまり，室町時代は，中央集権ではなく，地方分権的封建制の時代であったということである。

たとえば，『中世的世界の形成』を書いた石母田 正によると，「鎌倉幕府は律令制の全国的支配を打破して，地方分権的封建制のための政治的条件を完成した点に最大の意義が認められねばならない」としている[38]。端的に，直轄領が少なかった，ということである。日本史を専攻する佐藤進一も，同様の見解をあらわしている[39]。

足利政権は，財源が弱く，貿易（「公貿易」）にそれを求めていた。つまり，桜井英治（2015）は，桜井英治（2009）の著書『室町人の精神』（2009）の中でも「室町幕府は独自の官庫（かんこ）をもたず」を強調している[40]。

また，詳説日本史図録編集委員会編（2016）によると，「室町幕府の財源」は，多岐に渡っている（『図表』）。

日本の中世史専攻の桜井英治（2009）の著書『室町人の精神』の帯には，「人々は混沌と酔狂に時代の転換点を生きる崩れゆく秩序，中世の黄昏」とある。

桜井は，室町時代における日野富子の利殖活動や幕府の企業家への政策転換などビジネス活性化の始まりを告げている。

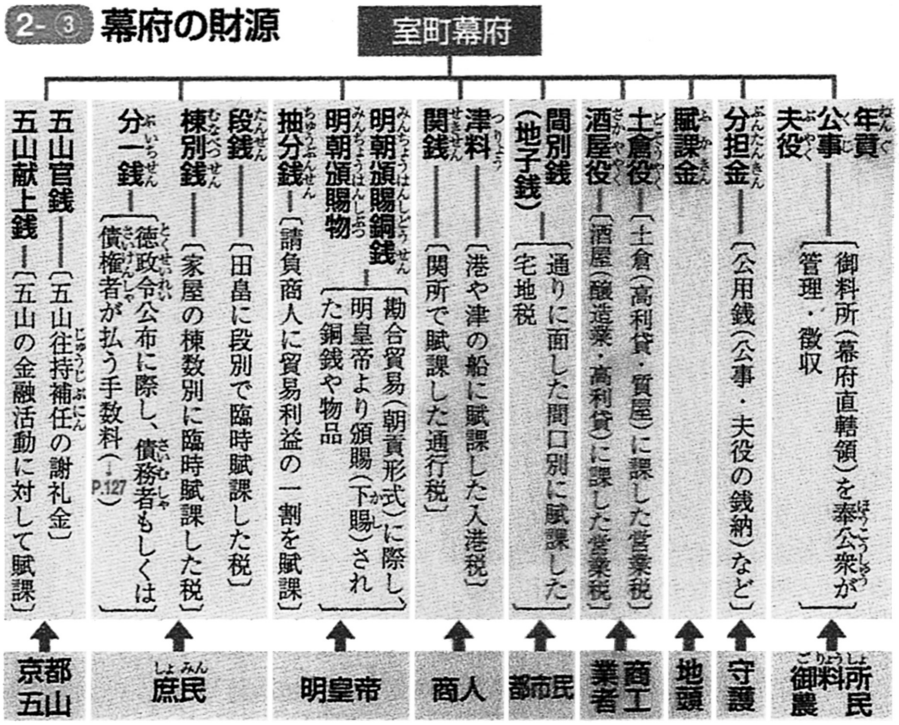
７．中世期の商人

これに対し，「交換経済」を担ったのは「商人」である，と日本経営哲学史専攻で国際経営論や経営哲学を研究する林 廣茂（2019）は述べる[41]。

日本の中世史専攻の佐々木銀弥（2022）は，中世の商人は様々な人々により構成されていたと分析している[42]。

中世商人の身分的外被（pp.28-29）

近世や現代の商人の源流として位置づけた中世商人をふりかえってみた場合感じさせられるひとつの特質は，彼らの身分や地位というものがこんにちの常識ではとうていはかりきれないような複雑かつ流動的なものであったことである。士農工商という厳然たる身分制下におかれていた江戸時代の商人，あるいは封建領主，農民，さらには職人だちと明確兄に区分された身分や立場におかれていた西欧中世都市のギルドの商人と比べて，日本の中世商人の身分や階層というものは，実に混



沌とし，流動的であったことが大きな特徴といえるだろう。彼らは中世の権門社寺の身分制のなかにがっちりと編みこまれており，近世商人のようなひとつの共通した不動の身分をついにもち得なかったのである。

中世の典型的な特権商人として中世商業史上に大きな足跡を残した供御人や駕輿丁などは，本来，朝廷・譜言責に従属し，奉仕を強いられていた古代律令制的系譜に由来する身分の人々であった。また，中央や地方を股にかけて手広く行商したことで知られる神人・寄人・御師・聖・巾伏たちも，それぞれ名だたる大社寺に所属する聖職の人々であった。地方の荘園・公領内の市や，室町・戦国時代の城下町などで特権的な商取引に従事した商人のなかには，荘官・名主・土豪・地侍をはじめ，がっては所の領主，大名の被官＝家臣といった系譜と身分のものも多かった。中世社会ではこうした権門社寺や武家につらなるれっきとした身分と，商人であることとは，さしたる矛盾・抵抗もなく中世の人々によって受けいれられていたのである。これは中世商人のひとつの特質であるとともに，中世社会というものの本質の一端を示唆していることがらのように思える。

中世の特権的座商人の典型といわれている山城国の大山崎油商人についてはのちに詳しくふれる予定であるが，彼らは本来，男珀の石清水ハ幡官の神事に奉仕し，内股燈油を獣納する義務を負わされていた，いわゆる「宣戦」の神人であった。彼らは石清水八幡官を人めぐる宮座を構成するとともに，大山崎の地主神である天神八王予社を祭る宮座人でもあり，燈油の販売と原料荏胡麻取引に強大な特権を付与された商業座を結成していた。そして対内的・対外的には「大山崎惣中」「衆

中」，ときに「侍中」として地縁共同体としての結合・組織を標榜した。神人身分集団が祭祀・地縁・職能に応じて，いくつかの顔と姿態を持つことができ，それらがさしたる矛盾もなく調和的に受けいれられていたのである。

こうしたことはなにも大山崎油神人だけの特殊なありかたではなく，むしろ中世人，中世商人一般に，なにがしかは共通していた特質でさえあったのである。

また，日本の中世期には，商人・町人の区別も行われ，戦国大名も豪商となって登場している。

商人と町人（pp.116-117）

いずれにしても都市の広範な成立ということは，前菜の歴史からいえば，都市に集住・定住して店舗を構え，専業的に商業を営む商人の広範な出現，すなわち「町人」の階層的な出現をも意味していた。単に店舗商人の出現という現象だけならば，平城京・平安京の官営東西市に市店を構えて商売を行なった市人の例をあげることもできよう。しかし，彼らが「町人」層としてひとつの階層を形成し，座といった仲間組織や，惣町といった町共同体をつくって自治的な市政運営の方向を示し，文化的にも町衆文化とよばれる民衆的な文化や芸能を創造するに至って，中世町人の出現と活動は，日本商業史・商人史上ひとつの画期的な段階を迎えたことを意味していた。

鎌倉では大町・小町・米町など都市化した地域に居住するものを町人とよび，それ以外のものを商人とよんで区別していたことが推測されるのである。

こうした区別は京都の場合も同じで，中世に入って急速に店舗が立ちならぶようになった三条・四条・七条・錦小路などの商業区域を町といい，これらの町々の十字路を中心に住みついた座商人のことを町座とよび，京の町人なみであった。これに対して同じ洛中に住んで商売に従事する「あき人」であっても，町座に属するもの以外のものは「商人」とよばれたのであった。

こうした見解から，室町期の「商人」と言われる人たちは，もはや特定の商売をする人たちを指しているばかりでなく，現代において，あらゆる事業に従事する「ビジネスマン」と呼ばれる人たちに他ならない，と言ってもあながち間違いと言えないだろう。

作家で歴史家の堺屋太一（2019）も，中世期の商人について書いているが，ほぼ同じ見解である[43]。

一方，上記した林 廣茂（2019）は，日本の経営哲学史を研究する中で，日本中世の商人たちの属性について書いている[44]。

そこでは，経営の執行役の多くは鎌倉仏教（禅宗・浄土真宗・日蓮宗など）の僧であった，としている。

８．武家領の拡大と金属貨幣の流通

鎌倉・室町時代になると，多くの国衙領と荘園の領主は武家に変わり（守護職，守護大名），領主は二大消費都市である京・鎌倉に住み，領地には荘主（しょうす）などの実質経営者を配置していた。その領地の経済を実際に経営した荘主の多くは禅僧だったという。彼らは計数に明るく，合理的・論理的思考の持ち主で領地経済の経営能力に優れていたと言われる。

村井章介（2013）によると，平安期から貿易はあったが，鎌倉・室町に入って一層盛んになったことが書かれている[45]。

特に，朝鮮や中国との貿易は盛んであった。また，村井は，中世における商活動など生活の一端を紹介している。

すると，農民や海民でもなく，多分に彼等のうちからの出自かもしれないが，彼らから物資を受け取ったり，彼らに物資を届けたりの役割を担うのが商人たちである。

この商人の中で，「近江商人」と呼ばれる人々が鎌倉期あたりに登場している。もっぱ

ら「座」中心の世の中にあって，独立に行動した「近江商人」の出現は，現代日本の流通機構の基礎を形作るものとしても，画期的なものであった。

社会の騒擾の中で生まれるビジネス

室町期には，どれほどビジネスが生まれていたのだろうか。

一方で，今日，新規の開業が増加している[46]。

2023 年の「新設法人」，過去最多の 15.3 万社。起業年齢は過去最高の平均 48.4 歳，シニア層に起業拡大。

2023 年（1 -12 月）に全国で新設された企業は，2024 年 4 月時点で 15 万 2860 社（前年比 7.9％増）判明し，2 年ぶりに増加した。2021 年の 14.4 万社を上回って過去最多を記録し，新たに市場へと参入する企業の増加が続いている。企業新設時の代表者年齢（起業年齢）は 48.4 歳と上昇が続き，過去 20 年で約 3 歳高くなった。起業者の高齢化には若年層や女性のほか，現役を引退したシニア層など多様な世代へ起業への門戸が開かれていることも要因の一つとなっている。

つまり，混沌たるこの時代，自分で事業を始めようとする（スタート・アップする）人が多くなっているように見える。

一方，室町期にもビジネスはより活況を呈していたことが想定される。世の中，大変な時代でも，人々は生きていかねばならない。生きていくためには，何か仕事を探さねばならないのは，世の習いである。アメリカでも，20 世紀初頭の大不況期に，スーパーマーケットやコンビニエンスストアが成功を収めたことを切っ掛けに多くの新規企業が生まれていった。

室町時代のような大混乱期でも，同様にビジネスを活発化させていったことが窺わせる。その先頭に走っていたのが，室町幕府という企業組織であった，という説を提起したのが，桜井英治であった[47]。

以上より，室町期のビジネスとマーケティングについてまとめておこう。

（1）幕府の力は，応仁の乱や一揆などで衰え，税収が不足した分，貿易関係で莫大な収益を得ていた。

（2）重商主義の時代で，民が活発に行動している。彼らは，国内のみならず貿易にも積極的に参加している（この点は，江戸期に入るとかなり抑えられてしまう）。

（3）闊達に行動する結果，次々に新しい職（ビジネス）を生み出している。

（4）独自の経営手法が発達していた（近江商人など）。

おわりに（「エコノミック・アニマル」と『野性の経営』という本）

今日，「商学」と言えば，その対象は「商」ないし「商取引」であり，したがって，商学では現実のおそらく夥しい商取引の有り様を研究し，そこに貫く理論やシステムを明らかにしていく学問との見方が，一般的であろう。

しかし，この考え方は，現代の商学の内容を十分に説明しているとは言い難い。

「商とは何か」については後に検討されるが，実際に，商は人間生活にとって欠くべからざる「交換」現象を含むと考えられ，したがって，その実態は歴史の靄に包まれた紀元前数千年まで遡ることが可能になるのである。しかし，長い時間の経過とともに交換の実態自体もさまざまに変化し，したがって，「商」を構成する要素も変更を余儀なくされている。

「商取引」は，「商人」が行う。この商人は，具体的には「職（職業）」で表現される。

つまり，人はすべからく「商人」であるが，それぞれ職を持っている。

結果的に，「商学」は，“人びとの職探しの学問”ということができると考えている。

それはどういうことなのか。

承久の乱や応仁の乱以後も人々はただひたすら戦かっていた。しかし，自分や家族も生きていかねばならない。生活していかねばならない。戦争するだけでは，それは得られない。人々はどう考えたのか。すさんだ世の中で，自分の身体のことを考えねばならかった。まず，魂を休めなければならない。心を休めるために，当時出現した単にあの世に託さない鎌倉新仏教，特に禅宗などが求められた。また，生きながらえるべく，食べていかねばならない。そのために手っ取り早く，銭が求められた。当時の世の中に出回っていたのは，日本国の鋳造銭ではなく外国銭（宋銭，明銭）や悪銭やビタ銭などであったが，人びと（幕府も農民も誰も彼も）は銭を得ることのできるあらゆる仕事を考え，実行した。

「百姓」（百商）の言葉はそのことをあらわしていると考えている。自由な職業を生み出すことを可能にしたのは，時代が封建社会のようながんじがらめではなく，重商主義社会であったし，資本主義社会になっていたからであった。

そう考えたとき，「日本人は，皆，商人である」と考えざるを得ない（現在ではでは，この「商人」は「ビジネスマン」と言った方が良いかも知れない）。このことは，文学者の夏目漱石の講演でも「学者」を例に明らかにされていることである[48]。

要するに，室町時代は，「商人」が跋扈した時代であった。換言すれば，人びとは，すべからく「商人」となった時代であった。商業を営む商人のみならず，製造業者や芸術家や学者・研究者も「商人」であったということである。

評論家の西尾幹二（2024）は，自著『日本と西欧の 500 年史』の中で，「10 世紀唐の崩壊から明治維新まで日本は実質的な「鎖国」だった」と書いている[49]。

しかしながら，筆者にはこの考えには首肯できない。これまでも見て来たように，少なくとも室町期は鎖国ではなかった。それどころか，国民こぞって，外国との貿易を行っていたということである。

現在の日本におけるマーケティングは，戦後まもなく全く新しい経営戦略論としてアメリカから直移入されたものである。

しかし，筆者としては，日本の経営史を見ていると，「マーケティング」という名前はなかったけれど，日本の中世期（鎌倉，室町）には既にそれが存在していたと考えざるを得ないのである。特に，室町幕府は，企業組織であって，時のマーケティングを先導していた感が深いのである。

現在の経営・流通史研究では，ほぼ江戸時代から紐解いている[50][51]。

ところで，今や先述された山本七平の「日本人は，エコノミック・アニマルである」という言葉がクローズアップしてきている[52]。日本人は，「政治的動物」ではなく，「経済的動物」ということである。

また，日本の経営学者の野中郁次郎を中心として書かれた『野性の経営』という本を書店で見つけて読んでみる[53]。この本の帯に，「日本人よ，いまこそ野性に目覚めよ」とある。しかしながら，こうした性質は，室町人の気性を彷彿させるものがある。

筆者は，「日本のマーケティングは，鎌倉時代に始まっている」を書いている[54]。

その後の，研究では，それが最も顕著に表れるのは，室町時代である，と考えるようになっている。

また，筆者には，現行マーケティングのアメリカからの直輸入について考えていることがある。それは，日本における学問研究には，「政治にしろ，歴史にしろ，あるいは経済や社会，文化にしろ，日本を相対化する視点が欠けている」と指摘する苅谷剛彦（2017）の説についてである[55]。

このことは，日本における「マーケティン

グ研究」にも当てはまる。日本には，そもそも「マーケティング」が 500 年前には存在していたということに外ならない。

また，その頃に「商学」という学問が生まれる素地（ルーツ）があったと考えざるを得ないのである。

注と参考文献：

（1）黒田重雄（2020）『マーケティング学の試み―独立した学問の構築を目指して―』，白桃書房。

（2）司馬遼太郎（2014）「室町の世」『この国のかたち（三）』，（1995 年初版），文春文庫。

（3）山本七平（1993）『日本人とは何か。（上）』，PHP 文庫，pp.270-273。

（4）大田由紀夫（2021）『銭躍る東シナ海―貨幣と贅沢の一五～一六世紀―』，講談社選書メチエ，p.32。

（5）桜井英治（2009）『室町人の精神』（日本の歴史 12），講談社学術文庫，pp.243-246。

（6）山本七平（1993）『前掲書』，p.274。

（7）中島圭一（2022）「渡来銭流通の開始と確立をめぐって」『日本の中世貨幣と東アジア』（中島圭一編），勉誠出版，pp.8-21。

宋銭流入の始まり

まず宋銭が日本に持ち込まれる窓口となったのは，中世を通じて最大の貿易港であった博多で，遺跡からは 11 世紀後半より検出されるようになる。そこからどの。ように広がっていったのかを具体的に跡付けるのは難しいが，文献史料では久安六年（1150）の奈良，応保二年（1162）・嘉応二年（1170）・安元二年（1176）の京都ないしその近郊と，畿内の土地取引で銭を用いた事例が確認され，12 世紀中葉までに銭貨の使用が首都周辺へと及んでいたことが判明する。また，高知県長岡郡大豊町所在の豊楽寺薬師如来像（国指定重要文化財，もと伝釈迦如来像）の胎内には，仁平元年（1151）八月四日付で「銭卅僧浄我」以下 10 件以上の銭による寄進が墨書されており，同じ時期に四国の山間都にも銭の波が到進していたとみられる。

12 世紀後半の京都の人々のごく身近にまで銭が広まったことを物語るのが，治承三年（1179）の流行病に「銭病」と名付けられたという『百錬抄』同年六月二十日条の記事である。「銭病」の実体については，銭貨流通に伴う経済の混乱を指すという説もあるが，そのような形而上的ないし比喩的表現は他の同時代史料と比べて甚だ違和感がある上，当該条は平清盛女で近衛基実室の平盛子の死去に関わる記事なので，彼女の死因となった病気への言及ととらえるのが素直な解釈である。渡邊誠は「平氏が推進する宋銭輸入を媒介にして，国外から伝染病が呼び込まれたと噂したのではないだろうか」とみるが，平氏が宋銭輸入を推進したと言えるだけの裏付けは乏しく，そのような穿った認識が当時の人々の間に共有されていたとも考え難い。例えば円形の発疹を特徴とする病気であることから，同程度の大きさで円い銭が連想されたというような，極めて即物的な命名とみるのが穏当であろう。そのような連想が働くくらい，京都の人々が日常的に銭を目にしていたわけである。

（8）桜井英治（2019）『交換・権力・文化―ひとつの日本中世社会論―』，みすず書房。

（9）三枝暁子（2022）『日本中世の民衆世界―西京神人の千年―』，岩波新書。

（10）たとえば，

・松岡正剛・赤坂真理・斎藤 環・中沢新一（2016）『（NHK100 分 de 名著）日本人とは何者か？』，NHK 出版。

（11）岡 潔（2023）『春宵十話』，角川ソフィア文庫。

（12）小林秀雄（1976）『本居宣長』，（1965 年から 76 年まで連載），新潮。

（13）寺西重郎（2003）『日本の経済システム』，岩波書店。

（14）網野善彦（2008）『日本の歴史をよみなおす（全）』，ちくま学芸文庫，pp.399-405。

（15）川出良枝（1996）『貴族の徳，商業の精神 ―モンテスキューと専制批判の系譜』，東京大学出版会。

（16）清水克行（2021）『室町は今日もハードボイルド：日本中世のアナーキーな世界』，新潮社。

（なお清水は，同じ見解をあらわす本を数冊出している）

・清水克行（2022）『室町社会の騒擾と秩序（増補版）』，講談社学術文庫。

・清水克行（2024）『室町ワンダーランド―あなたの知らない，もうひとつの日本―』，文藝春秋。

（17）岩井克人（2024）『資本主義の中で生きるということ』，筑摩書房。

（18）岩井克人（2006）『資本主義から市民主義へ』，新書館，pp.75-77。

（19）大田由紀夫（2021）『前出書』。

（20）岩井克人（1992）『ヴェニスの商人の資本論』，筑摩書房。

（21）林 周二（1999）『現代の商学』，有斐閣，pp.108-111。

（22）金 日坤（1984）『儒教文化圏の秩序と経済』，名古屋大学出版会。）

書籍の内容

台湾，シンガポールなどとともに儒教文化圏に属し著しい経済発展を遂げた日本と韓国。本書はこの両国の特徴を歴史的に対比・分析して，文化と経済の関係に斬新な視角から迫る。「韓国の経済と文化を把握するための最良の本」と山本七平氏激賞の日韓比較文化論である。

（23）黒田重雄（2024）「日本の中世期のマーケティングに関する覚書―室町幕府は企業組織であったという説を中心に―」『北海学園大学経営学部経営論集』，第 22 巻第 3 号（2024 年 12 月），pp.7-29。

（24）山本七平（1993）『前出書』。

日本の貨幣制定着に驚いた韓国人

エコノミック・アニマルとは決して悪い言葉ではありません。日本人は誤解しているのです。『人間は政治的動物』というでしょう。それをちょっと変えて『日本人は経済的動物』と言っただけです。動物と野獣とは全くニュアンスが違います。経済的野獣といえば，確かに悪いでしょうが……」

ある会合でのグレゴリー・クラーク氏の言葉である。それを聞きながら私は，「なるほど，語学とはむずかしいものだなあ，するとアニマルはむしろ日本語の『生き物』に近いのかなあ。だが『日本人を経済的生き物』とまず最初に気づいたのはだれだろう」とぼんやり考えていた。それが日本人であるはずはない。というのは日本社会にどっぷりつかっていれば，日本人が経済的生き物であるか否かはわからない。外国人が日本に来て観察し，自国と比較して，はじめて「こりゃ大変な経済的生き物」だと思ったはずである。それはだれであろうか。

おそらくそれは韓国人である。永享元年（1429 年）使節として来日した朴瑞生を驚かしたことは，金さえあれば，何も持たずに旅行ができることであった。さらにその前，応永二十七年（1420 年）に来日した宋キカンは，日本の二毛作・三毛作に驚くとともに，乞食が米でなく銭を欲しがるのに驚いている。確かにこれでは乞食でなく乞銭である。1420 年から 29 年とは足利義持から義量の時代，日本の貨幣経済はその時代にすでに，乞食にまで浸透していた。また金さえ持てば自由に旅行ができるということは，金を払えば泊まれる宿屋と，金を払えば乗せてくれるタクシーのような馬，金を払えば渡れる橋や渡し舟，有料道路ならぬ有料橋もあったということである。

今ならあたりまえのことだが，金日坤教授の『儒教文化圏の秩序と経済』を読むと韓国人が驚いた理由がよくわかる。李氏朝鮮の成立は 1392 年，日本では南北朝が合体し，足利義満の権力がどうやら確立した時である。そして前記の使節が来た 1420～29 年は，４代目の世宗の時（在位＝ 1418～1450）だが，金教授は『世宗実録」の興味深い記事を紹介しておられる。

「……世宗時代のエピソードを一つ紹介してみよう。朝廷では，中国から鋳貨を輸入して，これによって交換の便宜をはかろうとした。ところが，民衆は今まで通り，物物交換または物品貨幣による交換に頼り，素材が卑金属であったその鋳貨がさっぱり通用しなかった。

そこで，朝廷では布令を出して，今後貨幣を使用しないで交換をした者は，厳罰に処することにした。第１号の違反者が捕らえられた。その日暮らしをしている貧しい男であった。罰として杖百を打ち，水軍に入籍された。ところが，一家の主がいなくなって生活に困った夫人が，その後南山の松の木に首をつって自殺し残った子供たちが母親のなきがらか囲んで，一日中泣いていた，という話である」

金教授はさらに「李朝時代においては，王国を創建して以来，およそ 250 年の間は，貨幣の通用が定着しなかった」と記されている。ということは，日本で言えば，徳川時代になり，家光が死んで家綱が将軍になるころまで貨幣が定着しなかったということである。

だがこれは当時の東アジアに於いて韓国が後進的であったということではない。ベトナムは 18 世紀まで貨幣が定着しなかったといわれる。韓国は決して貨幣の流通に無頓着だったのでなく前記のエピソードが示すように，あらゆる方法で貨幣を定着させようとしたが成功しなかった。そういう国から来た使節が，乞食ならぬ乞銭がいるのを見れば驚いて不思議ではない。

これは当時の東アジアの基準から見れば日本の方が異常だったということであり，二人の使節は，日本人は政治的動物ではないが，経済的動物だと思ったであろう。というのは李氏朝鮮は実に整備された模範的な中国的体制を確立したが，当時の日本は下剋上的混乱の中で，小規模とはいえ，すでに討ったり討たれたりをくりかえしていたからである。

金教授が指摘されているように，貨幣の定着は「農業生産力の向上，商工業などの社会的分業の成立によって，社会的な生産力の全般的な拡大と，それを基盤にした交換生活の一般化，流通経済の発展があるかないかによって決まる」のであって，それがなければ政府がいかに努力しても貨幣は定着しないし，それがあれば，足利幕府のような無能政権でも定着する。

日本は 8 世紀に李朝と同じような努力をしたが，やはり貨幣は定着しなかった。時代は異なるが共に律令制である。和銅元年（708 年）日本ははじめて貨幣を鋳造した。これが和同開珎であることは教科書に載っている。以後十二種類の皇朝銭が鋳造され，韓国ではややおくれて高麗の成宗十五年（996 年）に鉄銭が，粛宗七年（1102 年）に銅銭が鋳造されている。そして日本の場合も，和銅元年から約 250 年間，政府がいかに努力しても貨幣は定着せず，永延元乍（987 年）一条天皇が銭貨の通用の促進を命じながら，一面ではその通用を限定し，仏事にだけ全面的に使ってよいとしたときに，長い貨幣定着の努力は失敗に終わった。そして准米・准布・准帛（はく）とよばれる生産物が納税および交換

手段に用いられた。これらは一種の物品貨幣と見てよいであろう。

(pp.273-276)

貨幣経済確立の基は輸入貨幣と金輸出

昔からお役人とは保守的なもので，一度きめたことは変えたがらない。経済は徐々に発展し，貨幣を導入すべき状態になっても，貨幣経済に移行しようとしない。これは，准米・准布の公定価格を定めた万物沽価法を混乱させるという理由であったらしいが，もう一つには材料の酸化銅を掘り尽くして，銅銭鋳造の原料がなくなったことにもあった。

後述するが，かつて世界三銅産国の一つといわれた日本も，その鉱石は殆どすべて硫黄と結合した硫化銅であり，これの精錬技術が当時はまだ開発されていなかったからである。こういう状態だとお役人はあらゆる「できない条件」を並べたてて不思議ではない。もしこの状態がそのまま継続したら，日本の経済はそのまま停滞したかも知れぬ。

そのとき，「中国から貨幣から輸入して流通させればよい」というまことに独創的な発想をした人間がいた。それが平清盛である。長寛二年（1164 年），彼は周囲の猛反対を押し切って宋銭の輸入を断行した。日本はちょうど貨幣経済に移りうる段階に来ていたのでこれが爆発的に流通する。するとそれによって経済は発展し，さらに多くの貨幣が必要となる，という循環を繰り返し，それがその時から約 250 年後に日本を訪れた韓国人使節を驚かしたわけだが，その端緒をつくったのが清盛であった。「武士とは何か」はさまざまな定義ができるが，「土地の所有権を主張し，貨幣を定着させたもの」ともいえるであろう。

これを「渡来銭」といい，寛永十四年（1637 年）まで，約 470 年間，日本で流通していたのは宋銭や明銭である。この，他国の貨幣を輸入して流通させるということが，現代人，特に外国人には非常に理解しにくいらしく，国際貿易センターで外国からきたビジネスマンに講演したとき，質問がこの点に集中した。今日的にいえば，日本は車や音響機器をアメリカへ輸出して膨大なドルを手に入れたので，紙幣の印刷をやめてドルをそのまま日本で流通させるような状態であろう。

では何を輸出したのか ── それが金であった。

この金の輸出と貨幣輸入はすさまじかったらしく，三上隆三氏は『渡来銭の社会史』の中で，中国の銅銭流出が余りにもすさまじく，ついに貨幣不足のパニックが起こり，そこで 1155 年に銅銭輸出禁止令を出す。それでもどうにもならず本格的な紙幣発行に乗り出す。紙幣が本当に流通した最初の国は中国だが，その原因の一端が日本にあったことは面白い。

どうもこの金輸出・貨幣輸入が，日本がしばしば非難される「集中豪雨的輸出」のはじまりらしい。やがて宋は滅びて元となり，マルコ・ポーロが来て 1295 年に帰り，1299 年に有名な「東方見聞録」を記すが，日本を黄金の国と書いたのは，以上事例の影響も受けているだろう。というのは『宋史』にそれを示す記述があるからである。「中国はすべてが存在する小宇宙」であることは事実だが，不思議なことに金だけは余り産出しなかった。現存する立派な金製品や出土品は，その殆どが属国からの貢物であるという。一方，奥州の砂金は，中国の史書にも記されているほど著名であり豊富だった。日本の金鉱が涸渇してくるのは徳川中期からであり，後述するが，日本に 20 年近く住んだスペイン商人アビラ・ヒロンも日本を黄金国と記している。

だが**その金も清盛の時代にはせいぜい金銅仏か金箔か装飾品をつくるのに用いられるくらいである。その金を用いて，これが割高な中国で割安の銅銭にかえて輸入して自国の通貨とすることは，まことに，経済的生き物らしい発想である。**だが，それならなぜ地金を輸入して自国貨幣を鋳造しなかったのか，和銅元年（708 年）以降 250 年間皇朝銭を鋳造していたなら，その技術がなかったわけではあるまい，という疑問は当然に生ずる。

(25) 桜井英治（2009）『室町人の精神』，講談社学術文庫。

(26) 清水克行（2021）『室町は今日もハードボイルド：日本中世のアナーキーな世界』，新潮社。

・清水克行（2022）『室町社会の騒擾と秩序（増補版）』，講談社学術文庫。

・清水克行（2024）『室町ワンダーランド―あなたの知らない，もうひとつの日本―』，文藝春秋。

(27) 網野善彦（2008）『前出書』。

(28) 三枝暁子（2022）『日本中世の民衆世界―西京神人の千年―』，岩波新書。

(29) 伊丹敬之（2023）『経営学とはなにか―経営という仕事を解明する実学の体系―』，日本経済新聞出版，p.15。

(30) 司馬遼太郎（2014）『前出書』。

(31) 五木寛之（2020）『大河の一滴』，幻冬舎文庫。

(32) 網野善彦（2008）『前出書』，pp.399-405。

(33) 川出良枝（1996）『前出書』，p. 39。

(34) Charles Louis de Secondat Baron de la Brède et de Montesquieu (1748), De l'esprit des lois.（モンテスキュー著（野田良之他訳）（2008）『法の精神（上）（中）（下）』，岩波文庫。）

(35) Adam Smith (1776), An Inquiry in to the Nature and Causes of the Wealth of Nations, The Fourth Edition, London.（アダム・スミス著（2000）『国富論（１）（２）（３）４）』，（第 5 版（1789 年）の訳），岩波文庫。）

(36) ジェームス・バカン著（山岡 洋一訳）（2009）『真説 アダム・スミス その生涯と思想をたどる』，日経 BP 社。

(37) 桜井英治（2015）『破産者たちの中世』，日本史リブレット 27，山川出版社，p.124。
(38) 石母田 正（2020）『中世的世界の形成』，岩波文庫。
(39) 佐藤進一（2020）『日本の中世国家』，岩波文庫。
(40) 桜井英治（2009）『室町人の精神』，講談社学術文庫，pp.328-332。

日野富子の利殖活動

朝廷では 1470 年（文明二）12 月に後花園法皇が室町亭に没し，後土御門天皇の親政が開始されていた。また幕府では 73 年 12 月に義尚が九歳で将軍宣下をうけ，日野勝光が「新将軍代」として義尚を補佐することになったが，その勝光が 76 年 6 月に没すると，以後は義政の正室日野富子が厭世的な義政にかわってしばしば政務を代行するようになった。

富子に八朔の進物を届ける人びとの行列が 1， 2 町にも達したといわれたのもこのころである。「御台一天御計らい」と評された富子の権勢のほどが知られよう。

日野富子というと，世の乱れを顧みずひたすら蓄財にいそしんでいた女性としてとかく評判が悪い。なるほど応仁・文明の乱中にも富子は莫大な米銭を蓄え，大名らに高利で貸し付けたり，米の投機的商売に手を染めるなど，旺盛な利殖活動を展開していた。80 年 9 月に徳政一揆が蜂起したときには，富子は土倉に収蔵されている自分の財物を守るために一揆の弾圧に全力をあげたといわれる。またこれ以前，幕府は内裏修理料の名目で京都七口に関所を設置していたが，その収益は内裏の修理にはまったく遣われず，すべてが富子の収入になっていたという。これらの関所は怒った民衆の手で同年 10 月にすべて焼き払われている。

寺社本所領還付政策の再開

肝心の義政はといえば，すでに応仁・文明の乱中から「公方は大御酒，諸大名は犬笠懸，天下泰平の時のごとくなり」というありさまで，乱後も退廃的な生活を続けていたが，78 年（文明十）3 月，突如，大乱によって長らく中絶していた寺社本所領還付政策にふたたび意欲を燃やすようになった。同年 10 月には土岐成頼・斎藤妙椿・畠山義統らの旧西軍諸将が帰参を許された謝礼のため使者を上洛させたが，義政は土岐と斎藤の使者には対面したものの，畠山義統の使者には義統がいまだ寺社本所領の返還を確約していないとの理由で対面を拒否した。義政は寺社本所領の返還を旧西軍諸将への赦免の条件として提示していたのである。

けれども寺社本所領還付政策は一向に進捗せず，翌 79 年 8 月には赤松政則が寺社本所領の返還を渋ったとして出仕停止を命じられ，北畠政郷も同様の理由で北伊勢守護を解任されるなど，義政はしだいにいらだちを募らせていった。

なぜ寺社本所領還付政策が進捗しなかったか，答はあまりにも明瞭である。「日本は悉くもって御下知に応ぜざるなり」「御教書・奉書においては厳密にこれを下さるといえども守護ども一切承知せず」「一向上意と申す事，いかなる物（者）までも用い申さず候」「公方すでにもってあやうく候つる」等々，応仁・文明の乱後の諸史料は将軍権力の凋落を指摘する言説に満ちている。

80 年 8 月に義政が美濃守護代人事への介入をはかったときなどは「我が御進退さへ近日正体なきのところ，人の上の事までは大いにしかるべからず」との辛辣な批判を浴びせられているが，これは例の尋尊が日記に書き記したもの。「今のごとくんば久しくはあるまじく候か」「世間の体とにかくに結願ちかく成り行く事に候」といった終末論を口にする悲観論者も少なくなかった。

私はだいぶ前に，義満が公家社会にデビューし，公武権力の一体化を確立して以来，将軍はもはや武士の味方ではなくなったと述べた。そのことをここでもあらためて強調しておきたい。寺社本所領の回復はこの権力構造に拠って立つ将軍権力が宿命的に背負いこんだ使命であり，将軍権力はこのために大名たちの支持を失ったのである。けれども将軍たちはこの政策をけっして取り下げようとしなかった。九代将軍義尚も，次の十代将軍義材も寺社本所領の回復をスローガンに近江親征を強行し，墓穴を掘った。これらの親征にはもちろん別の思惑も含まれてはいたのだが，それでもなお将軍が寺社本所領の回復を謳わねばならなかったところに将軍権力が抱えていた根本的なジレンマがあったのである。

政府から企業へ

将軍の権威が地に落ちた以上，当然のことながら税収もままならない状態にあった。それは何もいまにはじまったことではない。すでに応仁・文明の乱前から幕府は税収の拡大による財政再建の道をあきらめ，贈答儀礼や種々の手数料収入，「御物」の放出といった企業的な収益拡大に向かっていたのである。日野富子の利殖活動もそのような文脈のなかで解しなければならないだろう。その点をじつに鋭く分析していると思われるのが，尋尊の随心院厳宝が兄尋尊に書き送った次の書状の一節である。

諸人上意をも聞き入れ候はず候間，公方にもすなわち御還念候て，一分これも腰にまかれ候はではにて候間，七万貫ばかりまず御倉に上様（富子）御重宝入れ候か。このほか利銭は員数を知らず候。伊勢守（政所執事伊勢貞宗。貞親の子）これも質を執り候て一分腰にまき候。興ある事どもに候か。

「一分」を「腰にまく」という表現が最大のキーワードになろうが，文脈から判断して，これは財力を身につけるということ，それも財政的な手段によって得られた財力ではなくて，市場経済的な営利活動によって得られた財力をさしているとみてまちがいない。つまり，政治力ではもはや諸大名を振り向かせることがで

きない現実を悟った義政は，経済力で彼らの優位に立つ戦略への転換を決意したと厳宝は報じているのである。

厳宝によれば，富子の利殖活動もそうした新しい経営戦略の一環にほかならなかった。一口にいえば，武力から財力へ，政治力から経済力へということになろうが，こうした経営戦略は，じつは幕府がすでに歩みはじめていた道であった。ただ，それが一種の諦念をともないつつも明確に自覚化されたところにこの時期の新たな局面があったのだろう。しかもそれはたんなる戦略の転換というだけではなく，幕府により重大な決断を迫るものでもあった。政府であることをやめよ，一企業として生きよ，それがこの戦略の含意するところなのである。

これにたいし，段銭・棟別銭・地頭御家人役など，幕府の伝統的な税制を正統に継承していったのはむしろ大名たちのほうであり，それがやがて戦国大名の経済的基礎となっていった。ここに，16 世紀の戦国大名経済がより伝統回帰的であり，**15 世紀の幕府経済がより市場経済的である**という一種の逆転現象があらわれることになったのである。

（41）林 廣茂（2019）『日本経営哲学史―特殊性と普遍性の統合―』，ちくま新書。

交換経済を担ったのは商人である。荘園・公領の所有者・不在地主（朝廷・皇室・貴族・寺社の権門）は京や奈良に住み，その消費経済を荘園・国衙が納める年貢（農水産物・特産物）に依存していた。農水産物の流通と販売を担った商人（正確には商工業者）は，中世の初期から中期までは荘園・公領の所有者である各権門の直属民で，各権門の財政・経済に仕えるために，自由に流通販売や金融に携わる特権を与えられていた（網野善彦，2005）。

武家が政権を握った 13 世紀前半から金属貨幣（宋銭など）による交易が普及し，とくに関東を中心にした東国では，荘園や公領の多くが武家（御家人）の直領（じきりょう）になった。武家の直領での商人は，権門の直属民の身分から離れ，また，新興商人も登場して，武家の許可と保護を受け，武家に利益を与えつつ自らの富を蓄える商業を展開した。

室町・戦国時代の武家の経済力と軍事力は，その領有する土地の生産物と他領地の生産物との交易，そして宋・明や東南アジアとの貿易によって商人が稼ぐ収益に依存した。農本主義経済をベースに，商業に高い価値を置く重商主義経済が発展した。

（42）佐々木銀弥（2022）『日本商人の源流―中世の商人たち―』，ちくま学芸文庫，pp.28-29。

（43）堺屋太一（2019）『歴史からの発想―停滞と拘束からいかに脱するか―』，日経ビジネス人文庫，pp.48-55。

要するに，15 世紀中頃までの日本は，典型的な中世的貧困と因習的無知のなかにとどまっていたのである。16 世紀の戦国時代を考える場合，何よりもまず，それに先立つ時代がこんなに惨めで不安な世の中であったことを想起する必要がある。

16 世紀における戦乱による損失も，1 世紀前の貧困と治安の悪さがもたらした被害に比べると，けるかに小さなものだったのだ。

明，高麗から来た新技術

ところが，15 世紀中頃から，日本の技術は進歩し，経済が成長し出す。遣明船や倭寇が持ち帰った明，高麗の新技術がようやく日本人に消化され出したためである。

まず，この時期に起った進歩は，農業の発展である。農耕具が改良され，耕作方法も改善されて来たため，収穫が増大する。初歩的なものながらも潅漑と排水の技術が普及し，丘陵地帯や湿地が耕地化され出す。さらに，山地を利用した桑や茶の栽培も広まる。この結果，人口は徐々に増え，剰余価値が蓄積され出した。

15 世紀後半から 16 世紀初期にかけて，こうした新技術の採用と開発事業に取り組んだのは，主に各地の豪族層であった。そこに，彼らが富を蓄え勢力を伸ばす経済的基盤があったのである。彼らは，こうして得た経済的余裕で郎党を養い，妻妾を増やして子女を量産する。これが彼らの血族・人脈の拡大となり，近隣農民に対する支配力を強化した。のちに戦国大名となる豪族たちの農業振興と領地経営に対する熱心さは，この時期にその素地がつくられていたのである。

農業の発展は鉱工業の発達を促す。農業生産の向上によって，鉱工業に専従できる人数が急増するからである。15 世紀末から 16 世紀初めにかけて，顕著な発達を示しだのは，金属，なかんずく鉄の普及である。坑木を使って坑道を保つ技術が中国から導入されたため，鉱業が発達し，鋼や鉄の生産量が大幅に伸びたのだ。

15 世紀末から 16 世紀初めにかけての鉄製品の普及は急速で，わずか数十年の間に，ごく限られた階級だけの所有物であった鉄鋼の刀槍があらゆる農民の手に行き渡る。これがのちに一向一揆の武力となるのだが，同時に農業生産をも飛躍させた。鉄製農具の使用で，山地や固い地質の土地が開墾されたし，深耕による収穫の向上も図られたからだ。

一方，商業の発展も無視できない。特にここで注目されるのは，商業発展が国内流通面より外国貿易の面で先行していたことだ。15 世紀後半からは，遣明船に加えて私貿易も盛んになる。堺の湯川宣阿，池永新兵衛，博多の宗金らは，これによって巨富を得た。この当時，まだ国内市場は未発達だったが，一部の寺社や上層階級を相手にする海外貿易は大いに儲かる商売だったらしい。「応仁の乱」前後から 16 世紀の 10 年代に至る「戦国時代」初期，中国や朝鮮からの新技術を得て進められた産業経済の発展は，明治から大正初めに欧米の新知識によって促されたそれに似ている。

土地開発の一般化と鉄製品の普及は，成長への基礎づくりとしてはきわめて重要だが，平均的な生活水準を大幅に高めるまでには至っておらず，資本の蓄積は地方の中小地主（豪族）と外国貿易に従事する寄生的財閥によって行われていたのである。

楽市楽座と商業の発展（pp.52-56）

16 世紀の 30 年代からは，余剰農産物と工業製品の急増で，流通市場に出される物品の種類と量とが飛躍的に増大し，古い「座」の商人の取扱い能力をはるかに上回るようになった。当然，「座」に属さないもぐり商人が大量に発生する。油を商って美濃を乗っ取った斎藤道三（山崎屋新九郎）も，針をひさいで飢えをしのいだ少年期の豊臣秀吉（木下藤吉郎または「猿」）も，こうしたもぐり商人の一人だったに違いない。「座」に属した正規の商人なら，流れ着いた先で大名の家来になるような勝手な真似が許されるはずがない。

もぐり商人のなかには，この種の野心とバイタリティーに富んだ無頼が大勢いた。各地でもぐり商人に対する弾圧，捕縛，殺害が繰り返されたが，その商品流通に果たす役割は無視できぬものとなっていったのだからあとを断たない。16 世紀中頃には，彼らは社会機構を円滑に維持するための必要悪的存在だったのだ。ところが，このとき，この必要悪を制度として公認しようという大胆な領主が現れた。尾張一国を制するに至った織田信長である。

(44) 林 廣茂（2019）『日本経営哲学史―特殊性と普遍性の統合―』，ちくま新書。

(45) 村井章介（2013）『増補 中世日本の内と外』，ちくま学芸文庫。

中世人の生活を知る興味深い材料をいくつか紹介しよう。

室町後期になると，遺跡北半の市街地区画をとりまくかたちで石敷道路があらわれ，常福寺への参道かといわれている。また，遺跡の南端部には幅 10～16 メートルの環濠をもつ方一町の居館址があり，燭台・天目茶碗（てんもく）・聞香札（ぶんこうふだ）などが出土した。支配層の屋敷にちがいない。食生活の痕跡としては，刃物で解体した動物・魚の骨が大量に出土することが注目される。刃物傷をもつ頭骨や火であぶった跡がある四肢骨など，犬の骨も多い。中世で肉食が忌避されたという常識をくつがえす発見であった。

中世の木簡が 4 千点以上出土したことも特筆に値する。その多くは，物品の荷札・付札や商取引の際の覚・帳簿で，地方都市の物流・商業・金融活動を知る得がたい資料である。記された文字には，「売る」「買う」「卸す」「流す」「和市」「利分」などの経済用語が多く見られる。情報量の多い例を一つあげると，表裏に

「（前略）四百，かすにしのあこ（網子），ミ（巳）八月廿三，もと（元）百とりふん（利分）五もん（文）とりて，一はいり（倍）いたす（利出）。

十月廿日，もと百とりふん十まいとりて，一人とりいたす（取出）。十月三十，もと百とりふん，一人とりいたす」

と書かれた木簡がある。判読きわめて困難で，意味が取りきれないが，網子＝漁師が月利（？）5 パーセントで借金をして，巳年 8 月 23 日に元本と同額の利子を支払ったこと，ある人が 10 月 20 日に元本に 10 パーセントの利子を加えて返済し，質物を取り出したこと，10 月 30 日にも同様のことがあったこと，はなんとか読みとれる。

また木簡には，中世人の精神生活を語るものもある。阿弥陀や地蔵の名が記された板塔婆（とうば），法事に際して故人の菩提を弔うために造立された板塔婆，仏事・法会（ほうえ）の際に作成された大般若経転読（てんどく）札や修正会（しゅうしょうえ）札，さまざまな呪符・呪文を記したまじない札など多様で，こうした呪術的世界こそ，古代の木簡には見られない中世的特徴と言えよう。

一方で，有徳人がぜいたくな風流にふけっていたことを物語る闘茶札・聞香札もある。

(46) ㈱帝国データバンク情報統括部「新設法人調査（2023 年）」『TDB Business View』，2024 年 5 月 28 日。

(47) 桜井英治（2009）『室町人の精神』，講談社学術文庫，pp.331-332。

政府から企業へ

将軍の権威が地に落ちた以上，当然のことながら税収もままならない状態にあった。が，それは何もいまにはじまったことではない。すでに応仁・文明の乱前から幕府は税収の拡大による財政再建の道をあきらめ，贈答儀礼や種々の手数料収入，「御物」の放出といった企業的な収益拡大に向かっていたのである。日野富子の利殖活動もそのような文脈のなかで理解しなければならないだろう。その点をじつに鋭く分析していると思われるのが，尋尊の弟随心院厳宝が兄尋尊に書き送った次の書状の二節である。

> 諸人上意をも聞き入れず候はず候間，公方にもすなわち御還念候て，一分これも腰にまかれ候はではにて候間，七万貫ばかりまず御倉に上様（富子）御重宝入れ候か。このほか利銭は員数を知らず候。伊勢守（政所執事伊勢定宗。貞親の子）これも質を執り候て一分腰にまき候。興ある事どもに候か。

「一分」を「腰にまく」という表現が最大のキーワードになろうが，文脈から判断して，これは財力を身につけるということ，それも財政的な手段によって得られた財力ではなくて，市場経済的な営利活動によって得られた財力をさしているとみてまちがい差い。つま

り，政治力ではもはや諸大名を振り向かせることができない現実を悟った義政は，。経済力で彼らの優位に立つ戦略への転換を決意したと銀宝は報じているのである。厳宝によれば，富子の利殖活動もそうした新しい経営戦略の一環にほかならなかった。一口にいえば，武力から財力へ，政治力から経済力へということになろうが，こうした経営戦略は，じつは幕府がすでに歩みはじめていた道であった。ただ，それが一種の諦念をともないつつも明確に自覚化されたところにこの時期の新たな局面があったのだろう。しかもそれはたんなる戦略の転換というだけではなく，幕府により重大な決断を迫るものでもあった。政府であることをやめよ，一企業として生きよ，それがこの戦略の含意するところなのである。これにたいし，段銭・棟別銭・地頭御家人役など，幕府の伝統的な税制を正統に継承していったのはむしろ大名たちのほうであり，それがやがて戦国大名の経済的基礎となっていった。ここに，16 世紀の戦国大名経済がより伝統回帰的であり，15 世紀の幕府経済がより市場経済的であるという一種の逆転現象があらわれることになったのである。

（48）夏目漱石（2023）「道楽と職業」『私の個人主義』，講談社学術文庫，pp.9-36。
（49）西尾幹二（2024）『日本と西欧の 500 年史』，筑摩選書，pp.336-339。

10 世紀唐の崩壊から明治維新まで日本は実質的な「鎖国」だった

日本は奈良時代には盛んに中華文明を受け入れた。平安時代に入って 100 年ほど経つと「もはや中国から学ぶものはない」として遣唐使をやめてしまった（894 年）。やがて間もなく唐が崩壊した（907 年）。それ以後東アジアには国際的緊張がなくなった。元会儀礼（げんかいぎれい）といって各王朝が「礼」を競い合う関係があったのに，それも衰退し消滅した（『国民の歴史』〔全二冊，文春文庫，2009 年〕に詳述されている）。とともに日本国家も国際的争いから退いて，自閉的になり，驚くべきことに以後，天皇が権力の主流から外れた。

天皇とは別に上皇が登場し，さらに武家が出現してくる。王権が一歩退いて二次的になるという日本の独特な構造は，東アジアの礼的秩序をめぐる争いがなくなったという無緊張状態と切り離せない関係にあると私は思う。9 世紀以後，明治維新まで，日本は実質的な鎖国状態にあったと言っていいのではないだろうか。内乱や内戦はあったが，元寇と秀吉の朝鮮出兵以外に対外紛争というものを知らない。これはやはり地球上では例外的な歴史である。

（50）林 廣茂（2019）『日本経営哲学史―特殊性と普遍性の統合―』，ちくま新書。
（51）橘川武郎（2019）『イノベーションの歴史―日本の革新的企業家群像―』，有斐閣。
（52）山本七平（1993）『前出書』。
（53）野中郁次郎・川田英樹・川田弓子（2024）『野性の経営―極限のリーダーシップが未来を変える―』，KADOKAWA。
（54）黒田重雄（2021）「日本のマーケティングは鎌倉時代に始まっている―日本人にある商人魂の 2 面性―」『北海学園大学経営学部・経営論集』，第 19 巻第 3 号（2021 年 12 月），pp.27-56。
（55）苅谷剛彦（2017）「オックスフォードから見た「日本」という問題」『中央公論』，2017 年 9 月号，pp.80-88。

日本を相対化する視点の有無

政治にしろ，歴史にしろ，あるいは経済や社会，文化にしろ，そこでの議論で期待されているのは，事実に基づく知識だけではない。それらの事実を意味づける概念や理論とのつながりが強く意識されている。そのつながりを論理的に明晰に表現できなければ，よい解答にはならない。しかもそこには自分なりの理解力と思考力が求められる。そのための学習・教育が行われていると言ってよい。

さらに重要な点は，このような思考に不可欠な概念や理論が英語で与えられることである。日本研究以外で彫琢された概念や理論が活用されることで，理論的に共通の基盤（共約可能性）が与えられる。西洋語圏で発達した社会科学や歴史学の理論や概念とは地続きであり，それと無関係では使用に耐えないということだ。日本を相対化する視点がこうして提供される。

一見すると，日本の大学での日本人による日本を対象とした研究でも，しばしば海外産の理論が適用されたり，そこから借用した概念を用いた分析や説明が行われたりすることがある。「輸入学問」と揶揄されながらも西欧の知識を学んできた成果が，日本の社会科学の個性でもある。ただし，そのような場合に，外来の理論や概念の適用の結果が，翻ってその元々の理論や概念にどのような反作用を及ぼすかというねらいは企図されない。日本語で表現され，日本人が主たる読者と想定されるかぎり，そのような反作用を意図した理論化にはなかなか至らない。あえて単純化すれば，理論や概念の「借用」である。その適用が元の理論や概念の彫琢過程に戻されざるをえない海外での研究との違いが，表現する言語の選択によって生じるのである。

さらに言い換えれば，海外の日本理解の基盤には，もともと比較の視点があるということだ。海外の日本研究においては，日本という対象を自明視できない。先の国際会議のテーマのように「日本はなぜ（何か，いかに）問題か？」を問わざるを得ない。日本で日本人研究者が日本語で日本人読者向けに生産する日本を対象とした学問との違いはここに由来する。